

張 羅 大 加 飛
生 山 江 之
良 門 心 本 子



~13
3940
4



門 へ13
號 3940
卷 4

冊 五
號 五
函 九

本源

栗

同

近江縣物語卷之四

○ふくろのうを

いかに衣丸といふ盗人の鏡山のあつた陣屋と申しけ
りぐりよ、釘ぬきあつて堅固よあつたを守りおろし
此陣あてハ擄とせむ女をとりてひとりよ免置て身のあつた
出さん者よ、賣つてやぶささせり。これれをぬびとの
すめりあつたが、あつて人ものりこざりたれや。すめり
まじりたがりけ小屋つりてぬびと。常なるあまのこ
ゆきか、のこつて女をとりてあつてひきたる小屋の
れをとりてきけおきりる。このゆきへあつて
もむあつた。ゆきも事になげり。あつたのれ親あ

近江縣物語卷之四

人ぐらゐらひうけてゐるやうに置ていへば
おぼろ人ぐらゐの身のあらの銭りてきてつくのひもす
えち返してしまふすべし。何れも國のわきびと
うけて札さたりたれを老若男女つどひきておの
いして妻子とひきつれてもゆりぬ。おぼろ三日をりの
ほらにやす川を賣つてつる女を百人をりおほ
かへ皆賣つてつる女を百人をりおほ
て買はんしり事やき女四五人を残さるる。多哀れひ
けら此女をうけつて養ひ置おぼろの栄とつひ
費しやん。さうしてつらまてらんよ。軍令を破るは
いふやせむ。おぼろ一人のぬびと云らる。かゝる者いふ

銭よきて引つれ帰りのきと。今思ひより兵糧
をたくまの袋どものむか。まがのまのどの中かの女を
一人づつうちこめき。顔たちを見せば賣つていへん
いたと。いへばいをれり。さうんよ。美悪の沙汰よ
及ぶ。買とりてゆくべし。明日より此をさす。定む
べし。議定する。あま梅丸。都をわけて石山を
あつりに来りる。ぬい人の女をうていへん。と
聞て。菌生も。其中にありやせん。と。合法師は
宿りよとめてた。一人や。川をわけて。来る。釘
乃中に入。見あ。吾より。来りて。買つて。い
り。者二人。づく。まり。を。は。けて。い。れ。ば。一。人。の。常。人。か。

盗賊鏡山よ
ありりわ
とくま
女とマモ川
つれひて
娘まの
賣りて不



かれ一定菌生と買とらんとして来はるるべし。とて彼よ
 わてゆるしかをばいかにせんか。いれもあて我引つしてろくをや
 と思ひぬらるる常人も又梅丸と見つけて彼おれの望
 て女をかんとするやと不審く思ひたり。いとどたぐひは
 あらびがほつりて詞をよみまどへば。えんたにむたへて度
 志ぬる。あるふ。奥がぬより夫きかる袋を荷ひ出てさへ
 置つ心えぬ事か。守りたれどあき人は秘せざる。おひびと
 云るハ賣つてらん。あつたのハかう袋の中よこめて置り。各
 めよつきたらん。と。いひまてゆくと。いふ常人も梅丸も。おれ
 心よ思ひたり。ハ袋の中より菌生よあらず。いりともゆりても詮
 ならん。さりとて買えれば。さへび逢見んで。がりもあらず。

宿世の契り浅くす。買とりたる袋の中ハ菌生が
 せんもあらず。びとれかくはあつたり。あて見んと思ひて。價
 減くをまきのよきハんくのえらびはゆるせて。ひさたれハ價も
 たらんとかりし。いふハ袋の中よこめ置つれ。價は甲己の
 別。り。あつた。各袋ひとつ。あて。錢十貫文。よ賣り。は。次と。い
 常人が。傍よ。あつた。男つ。い。ち。あて。お。の。れ。は。か。や。れ。袋。を。か。ひ
 とらん。とて。錢を。ゆ。て。は。て。袋。の。口。を。り。あ。て。は。く。け。く。
 あ。れ。る。あ。る。方。より。て。ま。き。め。む。む。び。め。ま。き。と。い。ひ。中。より
 出。る。人。を。ま。れ。ば。を。ち。ぢ。の。女。の。目。ハ。か。あ。り。の。や。う。に。老。り。て
 口の。身。り。し。す。で。ひ。ろ。り。く。上。下。の。齒。ハ。氷。せ。く。杭。の。如。く
 色。ハ。ち。ぢ。ぢ。く。ら。ぢ。ね。と。の。べ。る。が。あ。ら。う。昔。僧。伽。多。を。追

江二系物語

かけ来たり。羅刹女とり物もかろんしと思ふ。けひ
 けり。かの男に向ひて。づき道を買とりて。まきとや。おのれは
 丹波の國の山へ。おひ出。持人の娘を。おひかけ。ま
 り。賣つ。たして。おくる。を。う。ひて。過。春のは。四條。ま
 ち。に。三十日。を。り。り。て。鬼。えん。か。と。を。れ。者。の。一。
 我と妻と。と。あ。つ。て。所。の。て。り。手。の。人。見。入。と。た。錢。を。け
 ち。を。れ。を。り。の。い。と。あ。に。た。り。ぬ。べ。し。と。ひ。け。手。と。り。て。
 ち。を。ひ。る。う。は。つ。き。し。ぬ。ぐ。鬼。く。あ。く。う。を。け。り。男。を
 見。る。う。り。わ。あ。と。も。む。れ。て。ま。ひ。て。有。る。が。我。大。君。の。國。も
 かる。物。の。住。て。い。う。れ。こ。道。へ。あ。う。う。か。る。物。を。れ。ば。た。ん。ち。で
 歸。り。ゆ。ひ。か。ん。し。と。を。け。る。卷。ある。男。に。く。り。り。で。ま。あ。

買。え。る。女。と。す。て。置。て。い。か。ん。の。と。も。頭。と。き。し。し。親。の。の
 仰。せ。り。お。の。れ。わ。て。ゆ。ぬ。あ。や。と。の。あ。れ。女。の。あ。ま。さ。く
 男。が。手。と。り。て。外。面。に。夜。又。お。れ。も。内。心。に。菩薩。を。の。し。
 い。か。人。の。お。れ。を。行。て。思。ふ。こ。し。か。ら。も。ま。し。う。男。の。ま。と
 と。り。て。お。の。れ。が。袖。ま。い。ら。ま。て。鴛。鴦。の。て。り。足。ど。り。あ。て。り。そ
 ろ。を。出。て。行。け。梅。丸。の。さ。り。う。袋。に。め。と。つ。け。て。ま。り。お。け
 る。が。左。か。れ。袋。に。う。た。お。く。う。こ。め。れ。を。ま。き。て。こ。つ。が。れ。を。
 よ。も。菌。生。ま。て。は。わ。ら。う。ま。し。右。か。の。の。ど。う。に。静。ま。り。て。え。ゆ
 色。ば。り。尋。ね。る。人。の。お。し。思。ひ。て。こ。の。袋。お。の。れ。買。と。り。ゆ。ひ
 て。ん。と。り。の。ま。ら。う。巻。せ。る。男。價。と。わ。ら。う。け。死。て。う。袋。を
 け。て。お。せ。し。り。梅。丸。あ。れ。菌。生。ま。て。あ。れ。し。心。の。あ。ら。

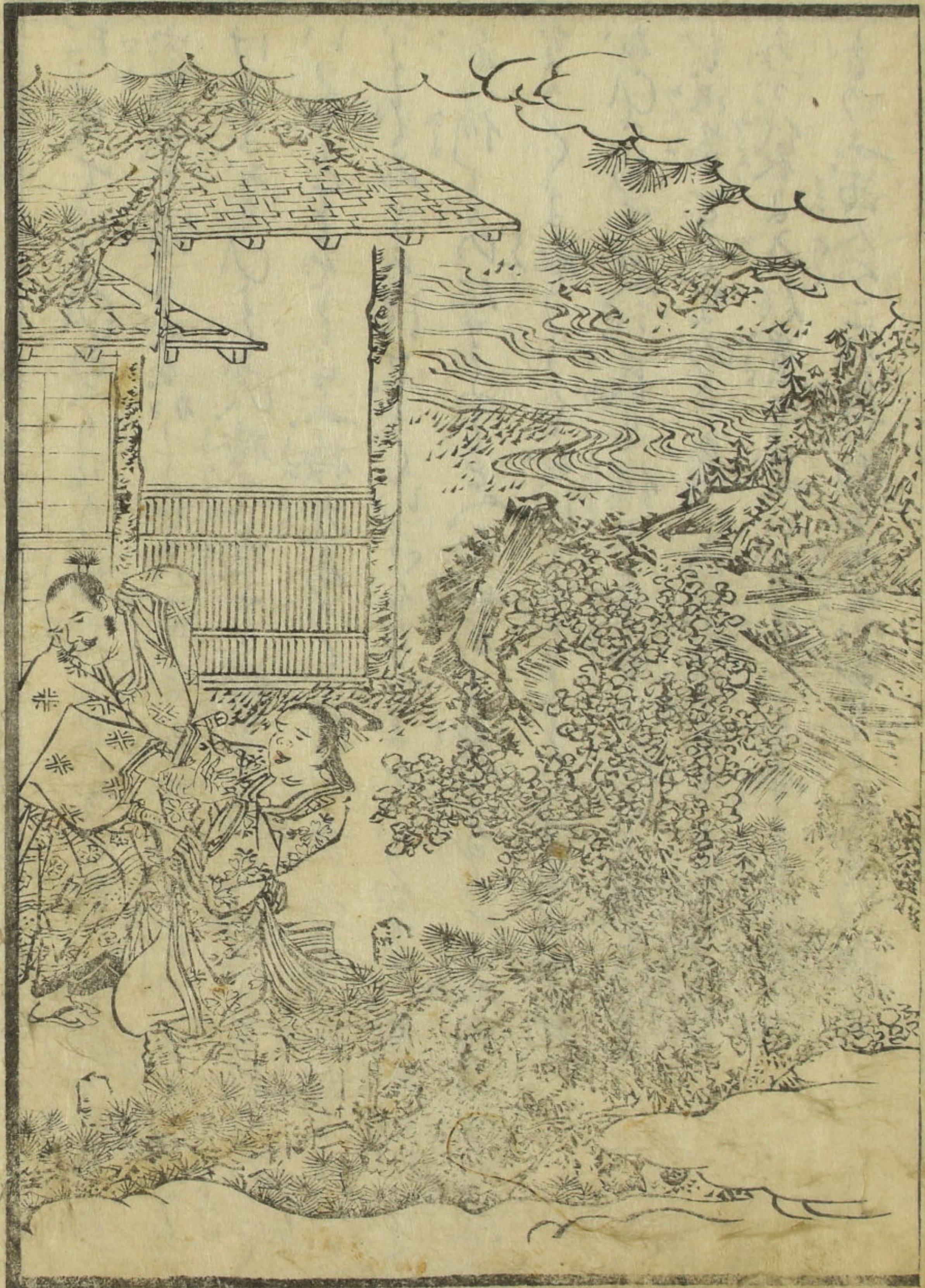
近江縣物語卷四

念願ありて袋の口をひらき見てよし。菌生よの似もつと
 とし、六十の何まりて髪は白く、の針とあるが、元老
 ぬる姫とぞ有る。梅丸のりのこと、朝も出ず、尻居り
 ごとく座して、あきれわたり、姫うちあはれなる顔りてあはせ
 け君らとぞうらうらまじり、れも親族の人あれを、目とへ
 あり、迎へよまじりやん、し、時、は、く、の、の、一、倍、と、か、い、て
 ひらひすあ、せん、と、し、梅丸、の、身、に、も、入、れ、ず、と、あ、ぬ、一
 たり、く、と、り、ひ、て、大、息、つ、ま、と、ぞ、り、常、人、を、う、た、見、つ、り、て、あ、り
 が、は、よ、あ、つ、つ、ひ、て、お、し、ら、あ、り、錢、十、貫、と、り、出、て、投、げ、か、の、あ
 袋、の、り、と、ま、り、て、我、戀、人、と、く、出、る、と、り、ひ、て、袋、の、口、は、
 何、げ、ん、と、ひ、る、よ、あ、づ、出、も、や、と、大、き、なる、聲、を、え、け、ら、く、と

うらいつつひて、手もあたらだて、ぞり、せ、り、と、く、常、人、よ、い、
 き、は、だ、つ、常、人、が、ど、り、きて、見、れ、を、さ、い、過、る、女、の、け、高、
 や、せ、る、が、ま、ま、と、お、す、と、く、ぞ、あ、つ、り、見、ま、つ、つ、我、と、い、
 思、ふ、あ、や、の、郡、の、大、領、が、ま、あ、む、ま、め、が、と、む、す、め、お、の、ご、よ、も、
 い、か、の、と、と、な、り、姫、の、流、を、よ、も、置、る、か、り、て、あ、い、れ、
 梅、が、え、よ、こ、つ、つ、ひ、て、お、く、ほ、と、き、ひ、あ、き、く、時、を、訪、は、
 い、よ、よ、あ、り、と、り、ひ、つ、常、人、が、顔、と、ん、と、これ、づ、つ、が、男、
 と、や、あ、つ、男、の、い、あ、ら、く、癩、瘡、の、あ、と、と、お、ほ、り、佛、の、
 け、た、と、ず、い、げ、あ、その、鼻、の、く、や、ほ、し、ま、し、と、い、ひ、
 う、が、い、ぬ、て、お、と、お、き、い、つ、常、人、と、あ、つ、物、ら、い、
 こそ、お、出、ん、と、す、と、お、い、び、ら、い、と、い、て、女、と、す、

ゆゑに者ハ頭うちをいひ定めて力ヲ手をもひてひしく
常人せんさかきぶく女が手をとらん見ゆ
と夫とすまきやと頭うちを引りて引りて
見ゆぬ人ら繩とりあきたりて女を常人ハ負を
りてくくつつけてさあ足のはたけんさあ
はきそめ常人ハ梅丸がおもをん所もわくく
とゆくとまわがんだ女をりて聲をわけていせ物語の
繪もかき安とばかりに押れうとひたさく
ら乃在原のあまんらそあまう鼻ひきくおま
り常人ひゆる汁顔あかくりて物かひいと女は
はくつらたひて出て行ありしゆぬびとも

たつてつひあがりり梅丸もせんさかき
宿へを帰りるがこま西念待つけて所は
けらおひいり梅丸光る姫とつれて海を
いふことをとら梅丸あくの物語を先姫より
りてあらしさういふりてさあ人を氏い
名ハ何とのたまふとを姫が身とありて名
なりくは耻しくおぼへりすぢあつたあ
おひとあつた氏も何とやらんありゆを
もぬ名をなすのりてを姫を
らが代衣よ入れ置てゆわ我名を今
とり西念こハ興あるゆ名ありとそ
の夜も姫と



つねんどらめまら
常人梅丸
盗賊のり
いまきて
菌生を買
とんこいあぬ
女どつれゆく

衣裳ゆわ君君とをよびよるがうらそちにならびつけざる名なの後のちく
 世よ中ちゆう又またおしうりて老女らうにょとあがめて御袋おんふくろと呼よぶ
 け時このときを始はじまりりその夜よいぢやすして取とりあけて梅丸うめまる
 ひそくよ西念さいねんよ云いひるかかす不用ふようの姫ひめとつれ来きりていりよ
 ともせんさねし但たしそ人のこころなき者ものハぬびとを欺あざむれ
 しとちうだちて怒いかりて此この姫ひめがその人ひとようりてちう罵ののさい
 ちうかぶもすべえりしれいといわゆる事ことと欺あざむきあふ
 ぬびとがたをよめて姫ひめが身みよあづりたる事ことにあらぬびとを
 聊いささうれと怒いかむまやだすかの姫ひめとて年老ねんじやうてあはぬ
 婢ひのぶとちうらんもむらういよせまんとしむ西念さいねん
 かゝる旅たびの空そらめて老姫らうひめ一人ひとりかゝりて使つかふくハハも

縫物ぬいもの洗あむかどあつてせんよ一いち版ばんのこにけりハ苗なり
 ちひて無なくべくやとく梅丸うめまるさび思おもひのぐりて云いひるハ
 我親わがおやとこのうら左衛門ざゑもん家の今いまや親夫史しめておちしゆせば
 此この姫ひめとやあつてををづくとちうそとちうちうんん思おもふもかの
 姫ひめといハ心こころあつておちしゆせば老人らうじんの心こころやとちうも
 ありやんりて西念さいねんがうらかの姫ひめ老らうとていぢやち
 けけよ婚く姻いんめしたる事ことむじ物語ものがたりあつて俄はたちうこと光
 う承うけひる事こともゆべとく梅丸うめまるさかち先また左衛門ざゑもんの
 ちうらつてて姫ひめをかちひて見みんて姫ひめをちうちうてい
 ちうら身み年ねんかけぬ人ひとやると若輩わくぱいむのちうちうちうけ
 呼よぶ事こと心こころづりて身みハいりよおはすあどちうちう姫ひめか

わがひて事りぬと。明日はいつかばうを人の手に入ん。
 其時くゆもひかへんとしつ。梅丸ねもびとよつと
 を仕てぶえをゆりし。さう守りしと。いふかゝるも。
 語り多し。を姫事のおまひがほつ。澄りておひ人さうも
 あてかの美人とねん。あまかさひいと成りて梅丸さ
 ぶりの。さひまわりの人ありとも。袋の中よこめあればいづれ
 と具人として買とらん。又も何やまりて。と人さだぐえ
 来らば人づかむ事おん。しを姫をれよ。を同ぢりし。
 うの美人常に尺をうりある物と大事として。腰のわたり
 よさしておん。せばくくちぐりて見おん。よおのつ。得るこ
 ぬらぐ。とす。梅丸敬馬て何とのさす。かの女ハ腰よ。人斗の

物さしてきり。とわら。し。を我心。も思ひあ。る。事。ハ。ハ。
 ち。是。り。や。せ。川。一。行。て。買。と。り。て。す。か。り。せ。ん。と。せ。き。ら
 さ。ぬ。よ。西。念。お。の。れ。も。出。供。仕。り。て。ん。や。ろ。こ。そ。よ。ハ。び。ぬ。で
 待。ま。し。と。も。ぐ。そ。だ。さ。け。す。そ。ひ。き。か。げ。や。す。川。を
 う。し。て。を。い。そ。れ。り。ち。て。う。し。よ。至。り。て。釘。ぬ。き。の。外。り
 西。念。を。ま。す。せ。置。梅。丸。ひ。と。り。入。て。見。せ。ば。旅。人。二。人。を。び
 わ。て。女。と。う。ち。ん。と。し。ま。ぬ。ひ。び。と。り。の。袋。を。荷。ま。ひ
 出。て。あ。り。の。が。り。は。う。つ。づ。ふ。ハ。さ。此。袋。さ。び。と。り。あり。
 志。る。た。三。人。の。買。人。あり。げ。代。表。ら。ま。き。り。て。う。す。ま。し。や。し
 の。ひ。て。け。を。一。人。の。男。す。と。出。て。お。の。れ。最。初。は。門。を。入
 り。て。お。の。れ。は。賣。り。し。と。ひ。と。ん。と。い。ふ。今。ひ。と。り。の。男。お。の。れ



丁二系初吾



ぬす人 柄丸 旗本
 引ひ入 菌生をそく
 て 迎ゆく 旗本
 安世 世のあひ
 そのあを 助す
 橋を 下り
 けり 石

丁二系初吾

の山ぐちのワリ中の中のはげだりまき姫ハ門乃外まぢ
 はけおるに西念があまはひてかけ身をて見ていふや
 ともひの来さあひりやとを西念声あけてよめの君やご
 おをひりとりは姫あがりてさうちやあまをひりあてや
 ねのひとまをいひまをのりておをひりひててか
 ふきいごてけりひあり程もやく梅丸代衣をあかき入来
 てまづ二人の士年しねんに錢ぜにとせて返かへしやりてさうちのち
 うちひもきてさうちやあまびや見んとてむまびり手城
 けてさうちするにあわめくまむまびりさうちげんを
 袋ふくろのまより来ていふは袋の中はあまの身みは
 近江國神崎里かえのくにのくまのなる安世やすよのむすめとて人は

袋の中よりさうちのまよりあまの梅丸うめまるの君きみまきあまやま
 声こゑ中なかにあまのたぐいもあねを手の舞まい足あしのうまを
 えび西念さいねんよりてむまびりまきとちて袋とひけは蘭らん
 まりび出でる梅丸うめまるが袖そでさうちうれは泣なみ泣なみ梅丸うめまる
 さまやおき門かどの雀すずめまきさうちの身みたれをぞ有ありまも
 由よしあまのさうちあまの顔かほうち見みくいふたおし
 かあわやこれや油あぶらひまや結むすぶをまを蘭生らんせいかにつけても
 夢ゆめさうちさうちさうちさうちさうちさうちさうちさうち
 いうでおんなさうちさうちさうちさうちさうちさうちさうち
 けさうちさうちさうちさうちさうちさうちさうちさうち
 すもすもせの縁えんさうちさうちさうちさうちさうちさうち

父君いづくよかをいしを蘭生るち口かにもまゐりて
 多ひつれをいゆくつひのまわらせびんをまゐりおれど
 賀の國あやすませあらんわが君とく父君は尋ねあひひ
 てぬひびとたにひきまをさうびりとの家は帰りの父のわ
 つせまかとりを梅丸いおとしが別は父とたのもまゐる人あり
 むうこの家と継ぐれを安世との家お演せんといひいひ
 といふあもこと少く姫とと泣中ていさびひかた我身よそ
 何れかくぬえ老ゆくと子とりよそのあつたを君は夫とわ
 りひきさるべき人を養子しかりいひて家をもつせむやと
 何りに養子のといさて置ておひびとのさうは家をも財とし
 かし子ありまかつとりことさ成てぶらぐ成てくハ又さひ

せれなき身よそ口君ち夫婦よりあひて語り多しと
 みもつれをいゆる男ハかきとあつたつちりゆてさうの
 つけを梅丸いさめて某かくてゆハ子ヤ一とれ思ひあひを遠
 かへびて内親族の人くあもあをせまわらさるべしとつ
 おぼえんよごにさも今い若のり多くとりを姫あつて昔語り
 せんもんちかやうくを又らそついであつたをさうらあも
 申せしどく氏もせれ田夫の妻なりといはげせかしり
 子細くあつたそあつたあも同をびあてやまねその夜姫ひ
 ちのハらふ吉日ヤハバ婚姻のさうのまゐりといひ梅丸
 うちありて此事いさふ父はあつたせむいばつてさう
 べらびとて対面せり別を奉り一人のやうありあひく

いくぢくの月日もたぐれははるごとく思ひもよりゆづ。菌生
 どのど何があひおこし。師多人の恩はむくゆりて免れて
 慾のらちあてはゆをすとりま。人々まひく感入ぬきて
 菌生をひとりあふき。免梅丸西念ハ屏風をぞく臥る所。
 かくりよハ弥生の末ありるまけ家ハまぐりま山ぐるのすまう
 みてまハ京まはしる用ありとて梅丸は何とを預てあか
 りまよりあま行だれハ外も人も取しがる草ぶきのあれさる
 宿かぐ。夜あけぬれハ春とて鶯の庭よきてをわら
 起も出ず。菌生ハうれこのおもしろにえねもやとありなれを。
 起てやりとめてあまきの柱よ脊なかりつ。われも度ち

まがえろ。竹ちろく。とねハセ。かじらげさ。わらに。菌
 垣のそらうりしをねぐとぬ。鳥あと思ひて。えやうた。
 入来て物をもいとす。菌生と抱きてゆるとい。菌生を声とあけて。
 ぬびびとそあれ。あうりしとさけ。ハ人々驚き。起いで見ると。
 盗人菌生と。二つ手にさうて走る。西念ありま。このまに。追来
 て。ぬすびとの腰。手をとけて。やうと。引と。あぬすび。足とあ
 け。く。げ。と。蹴。れ。ば。あ。う。り。は。あ。さ。り。て。様。さ。ぬ。倒。れ。ぬ。様。
 カ。と。り。て。追。う。け。が。一。町。あ。ま。り。お。れ。ぬ。菌。生。を。走。り。た。り。あ。
 乃。と。り。て。行。く。ま。け。し。く。と。う。ぬ。す。ひ。と。ハ。飛。ぶ。汁。は。走。り。
 追。つ。く。ま。あ。ら。び。危。き。と。し。を。ゆ。て。か。ま。向。ひ。あ。る。方。



うのまろそつ
 梅丸園生と
 ぬす人よ奪られ
 くる安世まわひ
 てとりしれい
 のりく回たす不

近江黒野山



近江黒野山

一六

おまがききてはしほひしれぬも着る侍のどくし何ゆ
 采りつがつくどりて盗人が項いほきてうかぶぬす人の
 きはる蘭生をすてり返りてぬきうちたせんとかき侍ご
 りて胸のあをりを突しれにぢあきさうあばひて倒しぬやぞカ
 巻る緒縄とりてひきさうり梅丸西念もおひくつけ身りて
 にも妻ととり返つて手をつき頭をさげてうちぶか侍は
 女はどの妻とあさしりふさあてひきの賊營よりおがひ
 えてはさうりていせしを侍扇のありして何も登りおけぬ
 うち見くやと二梅丸あせいおんまびやといひある由人どど
 うそく久く逢すのせしどいひつあまきとりたる教と
 師とあしたる橋の安世りり梅丸地まひれりて歩こまき

詞ものつぎとてかこ中蘭生ハ又君ぞつてさあつらう
 こそとそりつぎさく安世も涙とひとあうけて蘭生が手段
 らりてあをさめひて物いさびさるにてもかこくも賊營をの
 きゆ梅丸よめりあひる由ことすくせの契りあさかぶり
 あよとそらら梅丸盗人を引そんて顔を見まバきのあを
 川あせあひ旅人なりあふいぞわんし梅丸そく安世とあま内
 あく宿りともやひはし始終の物渡してあが時をふり
 安世ぬびとま向ひくおのれいる者よさうられて娘をバめてゆ
 んとせしつまず語れいさうんか頭うちをちんとカキ手
 かけてせしれぬぬびとまはくとりて何事とつていんあ
 常にむくらをづとて世をいとあまの神崎の常人とま

八よか... せいで... 安川... 隠れ... 住て... とも... 伊賀... その... とい...

さぬぐの悪行... 言語... せん... 又... 云... かん... たり... 又... 云... かん... たり...

近江果生言部

あぐらひてありきの石山いしやまよまうでよりなるにおのれはかきふ
べき事ことありか—こゝで對面たいめん見んとて四五日いごにちたれは我わがくまかき
使つかりつらばり出いで道みちまでありいさうびんくまおのひぬ
いさや梅丸うらまろ好よし—輕光かみ娘むすめはさうり武將ぶしょうであら—内うちす
内うち辺へのれと共ともか—こまいさり見奉けんぶり入いりや—六む昇しょう
進しんまのんよすがともなりぬべくや—とて梅丸うらまろを—うち業わざ
あぐらやづへ侍さむらいんこしハ親おやもこのつる人ひとは苦くるまぬる世よびて
まびんちくハ但たゞおりの不ふ之しを見奉けんぶり入いり奉ほうりて賊徒そくと誅つと伐ばつの味あじ
支度しどなどくく—く承うけたまりて存ぞん之しを由よし供くわ侍さむらいりてまゐりゆあん
いふ安世やすよ大だいより白しろびてその親おやし—のまの—人ひとも今いま世よをすそ
かられ住すまりて承うけたまハバそハのまのりゆであらんを—らこば—くこを

思おもひ多おほらぬいさでいあ—らんいひらんや—たもかくわ—見奉けんぶり
る—て—のひ定めゆくとてを蘭生らんせいハ—うやり。姫ひめも西念さいねんも
ともぐすめそくかをを—とて装束しょうそくきき—あほ—
きて出いでる。安世やすよハ具ぐ—る從者じゆしや—盗人たうじんの繩なわ—せていさみ
まちてぞうちつれ行いけ。

近江縣物語卷之四終

